
閉・言（へいごん）

土功征宗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

閉・言くごいご

【Nコード】

N2742A

【作者名】

土功征宗

【あらすじ】

○突如、福原は監禁された。目を覆われ、口も塞がれ、拘束され身動きとれない彼。そこに妙なショートタイムが幕を開ける。暗闇に全身の自由と言葉を閉ざされた彼が最後に迎うところとは？ 著、

(・、・) y・ 前トキしろっ

イチワ（前書き）

全四話の連載です。短篇の予定が長くなりましたので。ジャンルはホラーですが、ホラーではないかも。その時はすみません。

イチワ

暗闇が怖いと言うのは、個人差があるだろう。

私達が普段目にする物は、光の造作による人体の芸術作品のようなもので、様々な才色、形態を映し出している。

では、暗闇には何も“無”^{なし}なのかと言えばそうではない。目で確認できないだけで、存在自体消滅（0）になる事はないだろう。これを今まさに実感している者がいる。

とある一室に何故か手足を椅子に縛られ、目隠しに猿轡といった、確実に拉致監禁されている男がいた。

彼はサラリーマンで、そこそこの営利を上げる世論と戦う中堅営業マン。

何の変哲もない日々を過ごしてきた福原悦雄、三十五歳、独身。好きな食物は納豆に大根卸しとちりめんじゃこをおとしたもの。ルックスはかなり良く、一応そこそこモテる。唯一、人に見せられない趣味が、テレビへの独り言。特にメンタルニュース。

「まさかあの人が！」
なんて聞くと、

「オメエもだよ！ 偉そうにしゃしゃり出てインタビュー受けてるけど、あんたも含め世の中そんな奴ほど人を殺すんだ」

ギャハハ！

さらに、

「俺は殺ってない！」

と聞くと、

「間違いなく貴様じゃー！」

ギャハハ！ ギャハハ！

意外にシヨッパイ奴。

そんな彼にしてみれば、刺激を通り越し、恐怖と絶望に心を打ち

のめされた何者でもなく、目隠しで目の前真つ暗闇で、本人にしてみれば何処に居るのかさえまならないでいる。

この異常な迄の空気は堪え難い苦痛で、頭の中は変な妄想帯が駆け抜け、なぜか辿り着く考えは、『このまま何もなければいい』という錯覚を起こすが、手足縛られ、目隠しに猿轡された状態で“何も無い”では済むはずもない。

案の定、次の瞬間。

「はいドーンッ！」

突如、彼の近くから声がこだました。

二ワ

近くて遠いというのか、携帯のスピーカーから聞こえてくる声。

「ジャンジャジャーン！今週も始まりましたビックリどつきり目隠しゲーム」

拘束されている本人にしてみると、馬鹿げた芝居声で笑えないし楽しくない。

「はい！今回も似たもの同士が椅子に縛られて向かい合っているーす」

妙な言葉を聞いた。

そう、なんとこの謎の一室には、福原の他にもう一人、確実に拉致監禁されている男がいたのだ。

彼らは互いに似たように拘束され、向かい合っている。いや、向かい合わされていたのだ。

「さーで、今回君たちが選ばれたのは何故か！ そーれーはー……」
間が空く。ふざけた間が空く。

「あんた達は、隠れ肥満ならぬ、隠れ犯罪者だからです！ヨー！
……！！！」

（何、何言ってるんだ！）

福原ならずとも、多少なりの軽犯罪は犯してはいるが、（男なら立ち小便など）ここまでされる覚えはない。まして他人に恨まれる覚えも無かったのだ。

「あんたら、処刑！ヨー」

（なんなんだ、なんなんだ、なんなんだ）

福原は思いもよらぬ言葉を耳にし、恐怖と絶望からの憤りを拘束された身体全体で表した。

ゴツッ、ゴツッ！ ウーッウーッ！

身体を大きく震わせ椅子をずらしたり、猿轡からもれるうめき声。なんの抵抗にもならない。ともなれば、向かいの男もそうだろう

と思つたら、わりかし静かなもので、物音一つたてていない。

「あーらら、騒いじゃダメダメよーん。あんた達の近くにはもう一人、ジャジメーンツーが銃持って立つてるからヨー。てか、ヨーは飽きたな」

この緊迫感は何なのか？ “殺す”と脅されているはずなのに、そんな感覚が失せている。だけど、銃を持った男が傍に居ると、拘束されている現状からくる妙な違和感。

全身から出る汗と、肛門の辺りがヒク付き出している。
そんな時だった。

天使の濁声が？ 近くて遠くから聞こえてきた。

「警察だあ！建物には包囲した。大人しく人質を解放しなさい！」

この一室まで聞こえてくる、拡声器からの濁声。

（やったぞ！警察だ）

彼らに救いの天使が現われた。

サンワ

世の中広しと云えど、こんな馬鹿な犯罪はないだろう。いや、人を苦しめる犯罪はすべて馬鹿げていると言ってもいい。ただ、それが当たり前過ぎる世の中に身を投じているのが実情だ。

古からの能書きにあるように、もし本当に神は自分の姿を泥人形で表わし、この地に這わせたのであれば、将来こんな世を予期していたに違いないのだろうか。

サイダー。それは炭酸飲料水だ。

福原はこんな事を思った。

（警察がくりや助かったものだ！はやくここから解放されたい。したらカラカラの喉を潤すシユワシユワを飲みたい！）

もうすでに助かつている事を想定していた。変なアドレナリンが福原の脳内に染みだしている。

（あっ！やっぱビールだな……）

それを打ち壊す恐ろしき声。

「デカが来た！！　と驚いてみる……　テヘツ」

（あつ、あれ？警察が来てるのに誰も焦ってないなんて。なんでだ）
福原の心境は流れる文字の電光掲示板のように、“助かる”が流れていたが、そのブロック体は崩れ落ち、“謎”の文字に変わっていた。

「と、言うことでゲームスタート」

（いきなり何始めてんだよ）

「イマカラ、ナワ、トキカタ、オシエ、マス」

片言口調でさらに馬鹿げたゲームがつづく。

「しんどいな。ああオメエ達によ、縄の解き方教えてやるから、解け！そんでな、先に解いた野郎が後の奴を殺せ」

（はあ？なんなんだよ意味わかんねえよ）

いきなり『殺す』から、『殺せ』に変わったのには、動揺は隠せない。

「そんでな、手品用^{マジック}にすぐ解けるように細工してあつからよ、ダイジョブだ！そしたら目の前に一丁、チャカあるから脳天目がけてぶっ放てえオラア」

結局、切羽詰まった状況は変わらず、さらに警察が来たことにより、このゲームは早くも幕を開けてしまった。

ヨンワ・オワリ

「それ、まず手首を反してうまく捻って引け、それで……（縄抜きのマジックは簡単なものならば、よくネタ明かししているので省略）」

そんな説明を淡々と進め、福原がその通りに解こうとしたら、

「はいストープッ！ フライングはいけません。スタートと言ったら始めなさい。そうしないとジャジメーションツォーが二人ともぶっ殺しまーす」

あれ程の説明聞いて、頭では理解しているのだが、いざとなると『我先きに』は否めない。

（はえーよ！只でさえ訳解んねえーのに、人殺しの心構えなんか出来るかよ）

心は二分する。

（でも……やらなきゃやられるし、ああどうしたら……）

頭の葛藤と言うのは、本人の慰めでしかない。おそらくは、二卓なら誰でも先に殺すを選択するに違いない。

あえて、自分に言い聞かせているだけだ。“仕方がないことなんだよ”って。

福原も心は決まっていた。何故なら、

「はいスタート！！」

と、同時に直ぐに縄を解き始めたからだ。だが、そんな心を見透かしたように、

「と言ったら始めるんだよ！ ベタに引っ掛からないようにしないとねえ」

（……）

（そんなジョークはもう結構だ。自分の身は自分で守る！ 早く銃を、早く殺させろおお）

「犯人からは、なんの応答も無いのか！」

集まった警察は、何も変わらない状況にヤキモキしだした。

いつのまにか集まっていた野次馬とマスコミのたかり。

「仕方がない。情報提供者によれば、犯人は一人。こちら側に気をそらせている内に突入班を待機ポイントまで進める。合図を待って突入だ」

「はいっ」

その指示により、突入班は建設途中の真新しいビルの中に入り、標的の五階へと掛け上がった。

入り口は一つ。そこを囲むように待機。

「待機完了。指示を待ちます」

福原はドア一枚隔てた向こう側に、救いの手が差し伸べられた事にも気付くよしない。

そして……

「はい！スタートー！」

解いた。福原は懸命に解いた。無我夢中で解いたのだ。

「よし、突入！確保、確保だ！」

ドンッ！

突入班の蹴り開けたドアに鍵が掛けられておらず、いとも簡単に開いた。それに紛れて消えた発砲音。

！！！！！！

「抵抗するなあ！」

「確保！確保！」

福原は目を丸くしていた。

何故なら彼が縄を解き、目隠しを剥ぎ取った瞬間見た光景は、何もなく、頭から血を流し倒れていた死体。
すでに息は無いように見て取れた。

只、それだけ。携帯は福原本人の物で、小さなテーブルにポツリと置かれていた。

突入班が入って来たことに動揺し、辺りを見渡したが、ジャジメーンツの姿もなく、只、自分と面識も所在も知らない死んだ男だけだった。

突入班にボコボコにされ、捕まって、手錠を羽目られていても、すべてはスローモーション。

頭の混乱。消沈。

彼は解っていない。

「あつ！犯人が出てきました！カメラ捕らえてる？」

「ああバッチリ撮ってるぜ」

「犯人は何か大声で訴えている模様です」

社『営業部』

「部長。お茶が入りましたよ」

携帯電話を気持ちイイほどに音を立てて閉じ、窓の外を眺めていた男は、イスをクルリと回し、

「お茶、ありがとう」

その顔は笑っている。

「何か良いことあったんですか？北田部長」

「何故？」

「笑ってらっしゃるから……」

北田は、茶をスツと持つと、

「ああ、クライアントからいい返事を聞けたんでね」

「そうなんですか！良かったですね部長」

そういうとお茶を運んで来た社員が自分のデスク戻っていった。

北田は視線を湯呑みの茶に向けると、呟いた。

「実にいい返事だったよ！これで私の部長の座もしばらくは安泰だ。」

フフッ」

後日、北田の着信が福原の携帯に入っていた事に警察が気付き、北田を呼び事情聴取したが、福原が定時に出勤しなかったので電話をしていたと、電話には出たが無言、それに必死に呼び掛けたと話し、問題なく落ち着いた。

「こんばんわ。ニュースの時間です。今夜のトップは『人質殺害立てこもり事件』の続報で、犯人逮捕後の映像をお伝えします……」

その晩のニュースは各局で福原が取り上げられた。

彼の苦悶の表情は何かに取りつかれているようで、映像の終わる間際まで、彼が叫んでいたのは、

「俺はやってないぞー！俺じゃないんだああ」

その晩のニュースを見ていた一人の視聴者がデジタル光線の放つ画面の福原に、こう呟いた。

「間違いなくお前だろギャハハ！！」

四角い平面体の画面には、いつしかコンピューターゲームの単調羅列の映像が映し出されていた。

対岸の火事と言うのか、日々淡々と平穩無事に暮らしている日ほど、人は無常に他人事ですませてしまう。

無論、福原の側には銃はなく彼は殺してはいない。

寧ろ、被害者であって加害者ではない。

だが、誰もが被害者にも成りうるし、加害者にも成りうる日が来るかもしれない。それが、どんな些細なことであろうとも。

その時は死か？生きて冷たい監獄か？

目の前が真っ暗闇になり、全身金縛りのように成り、言葉も発せ

られない感覚を体験したとき、覚悟を決めてください。

電気を消して寝るときも、一度、自分のいる場所を確認してみてくださいかがですか……

完

ヨンワ・オワリ（後書き）

読んでいただき有難うございました。特にホラーではなかったですね。すみませんでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2742a/>

閑・言（へいごん）

2010年10月8日15時16分発行